

ヘルダーリンの *Hälfte des Lebens* について —— 作品解釈の試み ——

小林繁吉*

Versuch der Interpretation zu Hölderlins *Hälfte des Lebens*

Shigekichi KOBAYASHI*

Abstract

Hälfte des Lebens, das eines der neun Gedichte ist, die 1803 von Hölderlin Nachtgesänge genannt wurden, ist bisher von mehreren vorgehenden Forschern untersucht worden, die bei der Arbeit der Interpretation zu Hölderlins *Hälfte des Lebens* eine wichtige Rolle gespielt haben. In diesem Aufsatz handelt es sich um einen Versuch der Interpretation zu dem betreffenden Gedicht, das die Vieldeutigkeit der lyrischen Worte in den Versen enthält, die in verschiedenen Zusammenhängen Verschiedenes bedeuten und zu einem poetischen Zeichen entwickelt werden

Die immer beweglichen landschaftlichen Naturspiegelbilder in der Wasserfläche des Sees zeigen die Unbeständigkeit alles Irdischen in einer anderen dimensionalen imaginären poetischen Welt auf, die allein unter Hölderlins Gesichtspunkt betrachtet wird. Verborgен darin sieht der Dichter, der hier als einer der Schwäne erscheint, sein Haupt ins heilignüchterne Wasser tunkend die Verwandlung der bunten höchsten Spätsommerzeit in die eiskalte schwarzweiße schlechteste Winterzeit. Damit ergibt sich die Vergänglichkeit durch den Wechsel der vier Jahreszeiten. In *dürftiger* Zeit dichtet der Dichter Gedichte für alle Seienden in dieser irdischen Welt, die Himmlische im Himmel betrachten, um ihnen die Unterstützung und die Erscheinung der Göttlichen mitzuteilen und die Gnade der Götter zu offenbaren. Auf der Hälfte des Lebens will der Dichter den Beruf zum Seher in sich fühlen.

キーワード：ヘルダーリン，自然，水，冬，詩人

序

論題の詩 *Hälfte des Lebens* は、「夜の歌」¹⁾

と一括して呼ばれる九篇の詩²⁾の中の三篇の自由韻律詩³⁾のうち的一篇で、⁴⁾一般によく知られた詩であり、解釈の多義性をはらむ難解な詩の解釈の試みをするようになる。⁵⁾

論題の原詩の全文とその訳は下記の通りである。

平成 25 年 1 月 15 日受理

* 基礎教育研究センター・教授

Hälfte des Lebens

Mit gelben Birnen hänget
Und voll mit wilden Rosen
Das Land in den See,
Ihr holden Schwäne,
Und trunken von Küssen
Tunkt ihr das Haupt
Ins heilignüchterne Wasser.

Weh mir, wo nehm ich, wenn
Es Winter ist, die Blumen, und wo
Den Sonnenschein,
Und Schatten der Erde?
Die Mauern stehn
Sprachlos und kalt, im Winde
Klirren die Fahnen.

生の途上⁶⁾

黄色い梨をたわわにし
野バラに満ちて
陸が湖水にせり出すと、
なんじ優雅な白鳥よ、
なんじらは接吻に酔い
頭を浸す
神聖にして酔うことのない水の中へと。

ああ悲し、どこで私は
冬ならば、花を手に入れ、どこでなら
日の輝きを、
大地のかげを？
壁が立つ
音もなく冷たいままに、風の中
鳴る風見。

上記の詩は、字句通り一読する限り自然の情景を歌っているように思われる。しかしながら、それでもよく読み考えると、あいまいな点やよくわからないところも出てくる。先行研究を見

ても解釈の分かれる箇所はある。一般的にヘルダーリンの詩は、詩句の意味が必ずしも一義的には決定せず、多義的解釈が可能な場合がある。論題詩に関しても、たとえば、以下のような解釈上の疑問や問題点を挙げることができる。

題名 Hälfte des Lebens〈生の途上〉と詩の内容の関係はどうなっているのか？ hänget…das Land in den See〈陸が湖にせり出す〉とはどういうことか？ Schwäne, …trunken von Küssen tunkt ihr das Haupt ins heilignüchterne Wasser.〈白鳥よ、…なんじらは接吻に酔い神聖にして酔うことのない水の中へと頭を浸す。〉は何を表しているのか？ Weh mir〈ああ悲し〉とはどういう情景か？ Schatten der Erde〈大地のかげ〉とは何なのか？ Die Mauern stehn sprachlos und kalt, im Winde klirren die Fahnen.〈音もなく冷たいままに壁が立つ、風の中鳴る風見。〉は何を意味しているのか？

これらの問題に新しい解釈を試みることは可能である。論題詩をひとつのまとまった作品と考え、先行研究を踏まえ、それに独自の見解を付け加えつつ、作品自体からヘルダーリンの詩想を探究していきたい。

それでは、以下に論題詩の作品解釈を試みる。

第一段階

この詩では、広大無辺な自然界の極小の一部を切り取った風景から現実世界に匹敵する無限大の詩的空間が創出されている。丁度、湖の水面が外の世界の一部を映しつつ、外的世界のすべてを映しつくす可能性を秘めているかのように、大世界を小世界に取り込み、翻って、小世界の中に大世界が移動してきたかのように描出されている。

もしそれを、神的なるものたちが天空から俯瞰すれば、湖水の水に映る像が幻影であり、現実存する自然の光景が実体だということは一目瞭然であろう。しかし、この世のすべての現

象は湖の水に映る影のような存在であり、真の实在は別なところにあるという詩想がこの詩の志向するところである。したがって、Schatten der Erde〈大地のかげ〉の解釈⁷⁾も、夏に涼む憩いの場としての〈木陰〉の意味だけでなく、神的なるもの、神聖な存在としての大地のかげ、すなわち大地の湖水に映る映像を意味することになる。

一節目は、水面に映る晩夏の情景から、白鳥と名指されている詩人たち⁸⁾が、水に映る世界に陸が垂れ下がり、神聖な水を媒介に現実世界が神的世界に飲み込まれていく様子を天恵として熱狂して受け取り、神的な理を把握したと思いをし、瞬間的に真理を垣間見る世界へ酔い痴れて入っていくと、そこで酔い痴れた果てに素面の神聖な眼で覚り見る移ろいやすい人間世界を驚きとともに発見するという詩的場面が出現する。二節目は、一節目が夏の自然の豊富な色彩が鏡像のように水面に反映し、それゆえに、その自然の情景が水面に映る姿のように儂いものとなる。湖の中の白鳥にほかならない詩人たちの役割は、それを詩にして歌うこと、白鳥の歌として神々の存在を神的なるものたちの共存のもと間接的に歌うことである。二節目では、一節目と打って変わって、キーンとした硬質の、寒々とし硬直した白黒世界の中に、最後の詩句で突然キイキイという音が響き渡り、一節目とは次元の異なる世界が現出する。⁹⁾

一節目は水に映る世界が歌われ、二節目は水に映る自然界が現出する。湖は冬の寒さのため凍っている。そして晩夏の色彩豊かな自然景観を映していないし、本当に冷たい鏡の役割をしている氷自体は動かない。¹⁰⁾ 白と黒との織り成す無彩色の世界を映し出す。硬質で一様で変化のない、そして雪や氷で自然界の音や人間の声が消えてしまうか、小さくなってしまいう無音を志向する世界、本当に寒く冷たい固体の世界の中で、もはや白鳥である詩人たちは為す術を知らない。そして、〈大地のかげ〉すなわち、水面に投影される大地の反射形象は大地の影と

呼ぶことができ、自然界である大地の色彩豊かな形象のない二節目の冬の情景の中に、白鳥である詩人たちがいるのかどうか定かではない。この詩では言及されていない。いるかもしれないし、いないかもしれない。ただ、ここで、一節目と二節目を別々の全く切り離された詩節と考えるのではなく、あくまで一つの詩として読み取ろうとするならば、一節目は液体としての水に映る世界を切っ掛けに詩的世界が構築され、神的なものとの共生を通して神々の間接的实在の有り様が歌われ、二節目は、水の変化した固体としての氷の面に映る自然界の光景を出発点に、神々不在の冬の時代、あるいは神的ものたちの少ない冬の時代の詩人の詩を歌うことの困難さが滲出している。

Die Mauern stehn〈壁が立つ〉とは、湖の中の、あちこちの湖水の氷のことを指している。まさに固体としての氷の壁が詩人の歌を阻んでいる。

Sprachlos und kalt〈音もなく冷たいままに〉とは、湖水の氷をイメージ的に指すと同時に、神々と人間との仲介者の役割をもつ神的なものとの親縁性のある詩人の詩歌による預言成立の不可能性を表出している。最終句で、im Winde / Klirren die Fahnen.¹¹⁾と歌っているのは、冬の時代において、映像としての形象は無に等しいか、数少ないのだが、そこに風が吹き、風見の音が鳴ることにより、微かに神的なるものの道標としての示唆が読み取れる。冷たく吹き荒ぶ雪まじりの強風の中でこそ風の吹く方向は重要になる。風はどの方向からどの方向に向かって吹いて行くのか。その方向と、強さと、冷たさと、音の大きさ小ささに対して詩人は感覚を研ぎ澄まし、神的なものとの意志を知ろうとする。氷の世界は風によって軋み、キイキイ音がする。このように第二節は湖水の面の氷結の情景を起点にして、詩想は錯綜し、多重世界が交錯している。さて、この詩の結尾部で風はどの方向からどの方向へ吹いて行くのか。風は水の結晶体としての氷を軋ませながら、天空から吹き降り

て来て、地上を通り、氷上を旋回し、天上へと吹き上がっていくと考えられる。¹²⁾

第二段階

この詩を読むと、Mit gelben Birnen hängen (黄色い梨をたわわにし) で始まり、この一行目に続く二行目 Und voll mit wilden Rosen (野バラに満ちて)、そして三行目 Das Land in den See (陸が湖水にせり出すと) という詩句によるイメージの喚起により、梨の黄色、大空の青、湖の青、野バラの赤、(陸が湖水に) から連想される緑色など、色彩豊かな天然色(カラー)の世界を想像することができる。それに対して…Wenn / Es Winter ist (冬ならば)の箇所冬と名指されている二節目は、Wo nehme ich die Blumen, den Sonnenschein und Schatten der Erde? (どこで私は花と日の輝きと大地のかげを手に入れる?)¹³⁾と読めるように、花々の美しい色彩や太陽の輝きや大地の影(この場合は、湖水に映る自然形象の多色映像)のすべてを否定している。すなわち、白と黒と灰色の無彩色の世界が現出し、die Mauern (壁)が氷だとすれば、sprachlos (音もなく)——生命が息づくには過酷な環境で、言葉がない程に描写する自然の活動や活発な人間の営為が語りにくい状況——kalt (冷たい)氷があるだけなのである。

この詩の後半二節目の注目すべき詩句は、…Wenn / Es Winter ist (…冬ならば)かもしれない。しかし、Wenn es Winter ist, … (冬ならば、…)ということは、この詩の中の現実、すなわち現在は冬ではないということである。¹⁴⁾

この詩で歌われている詩句から読み取れる現実の詩的空間内に流れる時間での現在は晩夏である。したがって、一節目の最後の句 Ins heilignüchterne Wasser (神聖にして酔うことのない水の中へと)は前節と後節の節目の重要語ということになり、この場合、Wasser (水)がキーワードになる。¹⁵⁾一節目の最後に

位置する Wasser の直後に後半二節目最初の詩句 Weh mir (ああ悲し)が続く。¹⁶⁾この Weh mir は、この詩の中を流れる現在の時間内で、湖水の水に das Haupt (頭)を浸した詩人の眼から見た詩的世界を全面的に表している。¹⁷⁾死すべき人間の生きている世界を支えている神的なものたちのいる深奥の世界、すなわち人間界と次元の異なる神聖な別次元の世界を、突如あるいは神々の贈り物の時として垣間見た詩人は、im heilignüchternen Wasser (神聖にして酔うことのない水の中で)思わず Weh mir と心内で叫んでしまった、あるいは Weh mir と思いを発せずにはいられなかったのである。この瞬間はや、詩人の頭の中では冬の世界が到来し、冬の世界が現実のものと感じられたのである。¹⁸⁾詩人の心は、暗く寂しい世界の中で懊悩することになったのである。ここに至って詩人は冬の世界をまざまざと体験することになる。春や夏や秋の世界では、それ程に深刻に感得できなかった神々と疎遠になった世界、その世界は凄まじく荒れたすべてに活力のない無化した世界、神的なるものの乏しい世界であり、わずかに神的なるものが知らせてくれる…im Winde / Klirren die Fahnen. (…風の中／鳴る風見。)が氷の世界の中で軋めき鳴り響いているだけである。死すべき身の人間にとって救いはあるのだろうか。微かな救いがあるとすれば、それは白鳥たる詩人が二節目に現出した氷の世界から顔を上げた、すなわち湖水の中から外に顔を出した晩夏の時代にも、神的なるものの、人間たちへの支えを決して忘れることのないようにするために詩歌の中に神聖なるもの、神々の啓示を読み込み続けることにあると言える。そうすることにより、詩人本来の役割を果たすことができ、詩歌そのものも単なる言葉の羅列、つまり生命の通わない死んだような言葉の連なりではなく、実質内容を伴った真に神的なるものを内包した、外に開かれた詩的言語世界を表出展開するものとなる。それによって、人間たちは人間自身のよってたつ世界が決して人間たち

のみで成り立っている人間たちだけの世界ではなく、神的なものが時折支えている自然やその自然の一部が人間世界なのであり、生き物だけではない人間以外の自然界のものたちとの共存共栄が示唆されることになるのであり、それは、ヘルダーリンの詩的世界でたびたび言及されてきた原初の神話的世界、神々の間接的顕現と神となるものとの共生共存する世界を思い起こさせる。

夏の後の秋を経て、冬が人間の世界に訪れたとしても人間たちはそれを神々からの人間への試練の時期と考え、そのことを肝に銘じ、決して神々や神的なものをないがしろにせず、当該詩における最終句 *Im Winde klirren die Fahnen* (風の中鳴る風見。) が神的なものから人間への貴重なメッセージを表しているものと考え、神々や神的なものへ思いを馳せ、冬の後の春の到来、そして夏の輝きへと続く四季の循環による当該詩前節一節目の状況の再来を予感することもできることが希望的に歌い上げられている。¹⁹⁾

白鳥である詩人は氷の壁に阻まれて神聖な水からの天啓を受けることができない。詩を作ること、歌を歌うことは不可能になり、*Sprachlos und kalt* (音もなく冷たいままに) 冷たい氷の世界でただ茫然と立ち尽くしている。もはや白鳥の描写はない。白鳥たちは視界から消えてしまった。湖面に映る大地 (陸地の姿) を見て、それを自然の奥で支えているものの実体を知ろうとした白鳥 (詩人自身) は、湖面の下の水の中に頭を浸すことによって、すべて自然の営みが直接的には神的なものによって、そして間接的には直接人間界には顕現することの稀な神々の到来によって成り立っていることを悟る。

それはつまり、人間のいる自然界は湖面に映る幻影のように儂いものであり、神々の栄光の残像や神的なものの支えがなければ何一つ成り立たないということを実感することであった。神々の栄光の乏しい冬の到来をイメージの上で

体感した詩人は、湖の水面下から水面上に頭を上げることによって、自然のその大義を感得することになった。間違いなく冬の時代はやって来る。詩人は決心する。厳しい時代にも神的なものの導き手はあるのであり、詩人はその徴を感じ取らねばならないと。

第三段階

この詩における夏と冬の明らかな対比について述べると、流れる時の方向は一方向、春→夏→秋→冬→春 である。しかしながら、同時に季節の循環と同様時間の回帰現象が示されている。²⁰⁾ 詩人が考える夏という最高の時と詩人が危惧する最悪の時冬との極端な二つの時の明瞭な対比によって詩想を際立たせている。この場合、夏と冬という対立軸の一方にある極端な時期の間に位置する春や秋は問題にされていないし、言及されていない。

… *trunken von Küssen* (… 接吻に酔い) は、夏の神的なものの恩寵に満ち溢れているとき、その徴や天啓をたびたび詩人 (白鳥) は受け、有頂天になっている。そのうち、白鳥の中の何羽かが … *tunkt ihr das Haupt* (… なんじは頭を浸す)²¹⁾ というように *ins heilignüchterne Wasser* (神聖にして酔うことのない水の中へと) 頭を浸し、水面に映る映像の消えた水面下の世界の中で、冬の神的なものの乏しい時代を実感をもって体験する。そのような白鳥の一羽 (詩人) として *Ich* (私) が突如出現し、冬の到来を予め体験することになる。

また、白鳥である詩人が水の中に頭を浸すのは、嘴を入れたり出したりしてキスをしているような状況下では、水面に映った自分の姿とともに、辺りの景色も確認できるのに、水中に顔を潜らせてしまえば、そこには、いわゆる (大地のかげ) つまり自然の情景は映っていない。²²⁾ すなわち何もないのである。もちろん水草があったり、湖に生息する魚や虫などの小生物がいるのかもしれないが、世界を映す鏡として

の水面は消失してしまうのである。Tunkt ihr das Haupt 頭を水に浸すことによって夏には予感とともに確認されていた自然の移ろいである水に反射する映像がなくなってしまったという経験である。世界の実相をそれとなく指し示してきた予兆である湖面の映像、光の反射が実際はなくなってしまふ驚愕ないしは恐怖を実感した詩人の詩作品内での描写、すなわち作者の位置（作者の視点）²³⁾は突然客観的描写——神話的詩世界に即して言えば、上からの視点、鳥瞰図——から事物あるいは白鳥そのものの内部からの視点に変貌してしまう。²⁴⁾今や詩人は白鳥自身になり、いや白鳥自身の心の内奥にあり、その位置から Weh mir 〈ああ悲し〉と絞り出すような声を発し、第二節の神々の栄光の失せた、神的なるものの乏しい厳しい冬の季節の中での詩人の心情を吐露し歌い上げるのである。

夏（晩夏）は、神的なるものたちの支えに恵まれた季節であり、人間と人間以外の死すべき身のものたちとすべての被造物にとって、神々の恩寵を忘れ去ってしまうほどの豊穡の時代と言える。²⁵⁾そして、この時代に続く実りの秋を経て、厳しく恐ろしい死的世界——生き物の活動が極端に不活発になる死んだような世界——が続く。夏と秋の時期に神々の啓示を予感し、神的なものの実在に慣れ親しんでおかないと、来るべき神々の栄光の失せた神的なるものの乏しい冬の時代に死すべきものたちが耐え忍ぶことは不可能になる。²⁶⁾恐怖の季節である冬を乗り切ることはできないということである。単に詩人ひとりの問題なのではなく被造物全体の問題ではあるが、神的光の乏しい時代でもその徴を求め続けなければ、来るべき春と夏の光の強さには耐えられない。死すべき身のものたち、特に人間は、その日のために、神的光（暗い光）に慣れ親しんでおかなければならないのである。冬の時代に、真の詩人が神的なもの到来や神々の栄光の時を預言しなければ、最悪の場合、人類に春と夏と秋という季

節は巡ってこない。冬が永続してしまうこともありうる。神々の配慮により万に一つ、そういうことがないのは真の詩人を人間の世界に配置し、人間たちに警告を発している大いなる天上の意志と力があるからである。人間を含む死すべき身のものたちはこのことを決して忘れてはならない。死すべきものの土台をつくっているのは神的諸力なのである。

この詩から読み取れるヘルダーリンの詩的世界は、我々読者に厳しい冬の季節、猛吹雪で視界が遮られて何も見えない白い闇の中においても風の中の声を聞けと言っている。神々の栄光の失せたヘルダーリンの言う絶望的な現代においても、前方判読不能の状況においても、なお、微かな希望を決して捨てないという決意のもと、神々からの、そして神的なるもの呼びかけないしは導きの声を聞き分けなければならない。冬の嵐の中で… Im Winde / Klirren die Fahnen. 〈…風の中／鳴る風見。〉指し示す旗（風見）は必ずある。見えなければ耳を傾け聞き入れること。また音が聞こえなければ、心の音を感じ、心奥で聞き取ること。緻密で大胆、繊細で勇敢、また、悲観的で楽観的、苦しみつつそこに喜びを見出す、神的世界の読み取り手こそ真の詩人なのである。

結

詩人は湖の水面下の世界を体験することによって湖面に映る映像のシンボリックな意味を把握し、死すべき人間の生きている自然（大地・陸地を含む）および天上界に対して地上界にあるものはすべて、神々の栄光のもと、神々が間接的に神的なもの——たとえば、大地や湖や水や日の光、自然など——を通じて啓示しなければ不毛の世界にいるものとなってしまふと歌う。〈旗〉die Fahnen はシンボリックな詩的意味を有し、厳しい時代にあっても風が巻き上げる雪片や風がつくる大気の流れにより旗のような形を示し、道標となる。

この詩の題名 *Hälfte des Lebens* 〈生の途上〉²⁷⁾ は詩人の人生が完成の途上にあり、恐らく詩人の死によって詩人の人生は完成し、そこでその詩人の使命も全うされる。²⁸⁾ 詩人は生きている限り、すなわち死の直前まで自己の使命に忠実であり続ける。人間一般の人生も詩人のそのように全うすることが望ましいと言えるが、それはヘルダーリンの詩的神話世界における英雄や半神の人生そのものや彼らのこの世での役割を考えると過酷なものであり、人間一般の人生は、詩的な意味では、詩の題名のように不完全で未完成な言葉通りの〈生の途上〉で終えることが多いという帰結になる。²⁹⁾

この詩では、湖面の映像への晩夏の接吻から始まり一連の神々の恩寵あるいは神的なるものの支えの確認に至る隠されていた神々の啓示の真の意味を明らかにしている。この中で、死すべき身のものたちは神的なものたちの現存の永続を何ら疑っていない。それどころか春・夏・秋と続く四季の実りの根底にある神々の光を忘却していく。この時にあって、詩人³⁰⁾ は湖の水面下に頭を浸すことによって、神々の実在をほぼ誰も信じなくなった冬の到来を予め体験し、実感する。厳しく辛く苦しい季節の中で、神的なものの呼びかけや声に耳を傾ける。

神々の啓示、予兆を歌にして預言者のように人間たちに示すこと。それが詩人の人生の真の意味である。ゆえに *Hälfte des Lebens* は詩人の〈生の途上〉を歌った詩と解釈できる。

ANMERKUNGEN

- 1) 1805年刊行の年刊詩集の中の九つの詩。1803年末の出版者あてのヘルダーリンの手紙に一括して *Nachtgesänge* 〈夜の歌〉と名づけて発表する心づもりがあったことが示されている。StA. VI S. 436f. u. S. 1093, StA. II S. 500
- 2) 九つの詩は下記の通り。
StA. II
- S. 56f. Chiron
- S. 58 Thränen
- S. 59 An die Hoffnung
- S. 60f. Vulkan
- S. 66 Blödigkeit
- S. 68 Ganymed
- S. 115 Der Winkel von Hahrtdt
- S. 116 Lebensalter
- S. 117 Hälfte des Lebens
- 3) 上記2)のうち、上から6篇がオーデ、下の3篇が自由韻律詩。手塚富雄氏は自由韻律詩の三篇のほうが「夜の歌」にふさわしいと述べている。
ヘルダーリン全集2 (1973) S.415.
- 4) *Hälfte des Lebens* は九つの詩のうち二番目に短いもの。Lebensalter とほぼ同じ長さであるが少し短い。最も短いものは *Der Winkel von Hahrtdt*。Michel Gehrman 氏は九つの詩個々ではなく、「夜の歌」全体をひとまとまりのものとして考察の対象にし、その連関を探っている。
Gehrman (2009)
- 5) ヘルダーリン詩は個々の部分(詩の一語一句)ではなく、詩歌全体から解釈が可能になる。ただし、後期の詩群ではそれも不可能になる。
Binder (1955-56) S.198.
- 6) *Hälfte des Lebens* は〈生の半ば〉〈一生の半ば〉〈生命の半分〉〈命の半分〉〈人生の途上〉などの訳が可能である。
ここでは〈生の途上〉とした。
- 7) この部分のエピグラムを指摘し、解釈した研究者によると、*Schatten der Erde* は *Schatten der Rede* となる。つまり *Erde* → *Rede*、*Er* → *Re* という読み方である。
Gehrman (2009) S.106f.
- 8) *Ihr holden Schwäne* の箇所は *Schwan* イコール *Dichter* とした。
Jochen Schmidt 氏の論に拠る。Schmidt (1982-83) S.128ff.

- 9) Wasser が Eis に変化することと Eis → eisig、金属音と関係づけられる Eisen → eisern と音が似ていて klirren が強調されている。また、Fahne は通常〈旗〉の意であるが、ここでは Windfahne あるいは Wetterfahne 〈風見〉の意とする。
- 10) 夜の歌のひとつ Ganymed の中のことば Schlacke を氷塊と解する読み方があり、Hälfte des Lebens 中の詩的情景に氷結の発想を持ち込むことはそれほど無理なことではない。ヘルダーリン全集 2 (1973) S.78.
- 11) Binder (1955-56) S.199.
..... Hier stehen die Mauern „sprachlos“, weil Sprache und Gespräch Zeichen der Kommunikation sind, und die Wetterfahnen „klirren“, als ob sie aus Eis wären und zerbrächen
- 12) 神的なものたちの天上からの視点の変化は〈上空 → 地上 → 上空〉であり、詩人の視点の変化は〈湖面 → 水面下 → 湖面〉という動きになる。
- 13) Sonnenschein と Schatten der Erde (下線部筆者) は本来〈光〉と〈影〉という対立語であるが、ここではその意味には取らない。
- 14) ここでは、一年の四季の中の夏の終わりの一時期を歌っている。春・夏・秋・冬という四季名を題にした詩はヘルダーリンの最後期の詩群で頻出している。
小林 (2011) 参照。
- 15) Wasser の対立語と考えられる Feuer については Gilby (1973) 参照。
- 16) 親しい仲間や同胞に呼びかける親称複数の ihr が Schwäne 〈白鳥の複数形〉に用いられている。が das Haupt は〈単数形〉になっていて、後節最初の Weh mir で一人称単数の ich が唐突に出現する。
- 17) 音韻的には、後節最後の二行が a, i の母音各 3 回、o, u の母音各 1 回になっていて、a, i の母音 が多用されている。また、Wasser の後 Weh mir → wo → wenn → Winter → wo → Winde と後節は Alliteration 風に w が強調されている。そして、そのことによって、冬の厳しさが音韻的にも表現されている。
Binder (1955-56) S.199.
- 18) 過去も現在も未来も自由に行き来するヘルダーリンの詩的世界における詩人の様子がこの作品においても見て取れる。
- 19) 人間には常に至福の時期 (たとえば常夏) はないのであり、春や秋のような中間に位置する間の時に挟まれた厳しい冬の時期が必ずやあるというヘルダーリンの詩的認識のひとつである。
- 20) 第一節と第二節が一義的にはそれぞれ夏と冬を表しているとしても、ヘルダーリン詩においては、通常、夏を想起すると同時にその前の春や、その後の秋が想定され、前提とされる。ゆえに、冬を想起すると同時にその前の秋と、その後の春が想定されることになり、それはヘルダーリンの主要な詩想である四季の変化を表現していることになる。
小林 (2011) 参照。
- 21) Tunkt ihr das Haupt の箇所に関しては、tunken の隠された意味として水面上の生の世界と水面下の死の世界との往還から生と死の織り成す世界を垣間見るといふ形象を想定する解釈がある。Gehrmann (2009) S.101ff.
- 22) 湖面の上にある白鳥 (詩人) の半身は夏の恩寵の時にあり、水面下の白鳥 (詩人) の頭は冬の乏しい時の中にある。頭は水面上から水面下へ移動し、水面下から水面上へ再度現れ、夏と冬のイメージ、ヴィジョンは目まぐるしく転換する。
- 23) 詩人ヘルダーリンは Hälfte des Lebens の詩の内部にいと同時に外部にもいる。このことについて詳述すると、詩人自身が白

鳥の身となるのは内部に在ることであり、夏の情景を描写しているように見える第一節は外部から見ている景色のようである。しかしながら、翻って考えてみると、白鳥の内部（内奥）に在る詩人自身が第一節と第二節全体の状況を把握し歌にしているのである。それは、内部というよりも外部に在ることを示している。反対に、第一節で情景を歌う外部の位置に在る詩人自身の視点そのものが、詩の内部に入り込んでいる詩人そのものの意識ということになり、内部と外部は錯綜しつつ逆転していると言える。

24) Binder (1955-56) S.196 L.9ff.

…… Der Dichter ist bei der bisher nur geahnten Einsicht angelegt, daß es nicht genügt, nur jeweils zwischen dem vorhandenen Ich der eigenen Person und der vorhandenen Welt, wozu auch die überlieferte christliche Weltordnung gehört, einen Aussagezusammenhang herzustellen, sondern daß er die Welt in eine dichterische Welt und das Ich in ein „poetisches Ich“ verwandeln muß. ……

25) 永遠の存在である神々に対して、人間は死すべき有限の存在であり、瞬間的に熱狂するが、すぐその状況に慣れ覚めてしまうものだからである。神々との和解は神々の側からの現存によって成り立つのに、そのことを人間はすぐに忘却してしまう。

26) 夏の絶頂期がそのまま即、冬の最悪の時期であるという認識、そして冬の終わりが夏の絶頂期のはじまりという考え方が詩の根底にはある。極限（最良の時）から極限（最悪の時）へのダイナミズム —— ヘルダーリンに見られる力動感 —— といったようなものもこの詩にはある。水面に映る映像の背後に、本体としての自然や大地の形象がるのであり、それは詩的には神的なるものの姿であり、神々が支えている場合は実

在の輝きをもつ。水面上の仮象を実相だと思いを違えるのが人間たちの常なのである。

27) おそらく、神々不在の、あるいは神的なるものの乏しい時代の死すべき身のものの生命は半分はほぼ無に等しく死んだも同然であり、言い換えれば、生命の半分はただ無為に無駄に費やされ、本当の生命の半分しか生きていないという寓話と読み取れなくもない。したがって、*Hälfte des Lebens* の意味するところもいくつか考えられ、〈生の途上〉のほか、〈生命の半分〉の意味と〈人生の半ば〉の意味のいずれも併せ持つとの解釈は見方により可能である。

28) この詩人の使命に関係する天啓による詩的時間単位は下記の四種を指すと考えられる。

(1) 一日：朝・昼・夕べ・夜

(2) 一年（四季）：春・夏・秋・冬

(3) 人間の一生（人生）：幼少年期・青年期・壮年期・老年期

(4) 人類史（神話的時間）：

・原初の神々に見守られていた時代

・神々の栄光のもとで人間が最高度に力を発揮できた時代

・人間が神々より力を持つと思ひ、神々と離反しはじめた時代

・神々と離反した光の乏しい暗い時代
— 現代

小林（2011）参照。

29) ヘルダーリン詩の詩想に寄り添って言えば、我々人間はみな *Hälfte des Lebens* 〈生の途上〉〈人生の半ば〉にあって、通常〈生命の半分〉しか生きていない —— なぜなら神的なるものの導きのない人が大多数だから —— のであり、それゆえに、人生を全うするためには、神的なるものの導きを信じ、神的なるものの支えを必要とするもう片方の「生命の半分」が必須である。神々の実在を確信し、神的なるものの導き

や支えがあつてはじめて人間はその人生を全うしたことになる。通常人間は自分を頼み、自分(人間)しか信じない。したがって、ほとんどすべての人間は、実は、生命の半分しか生かしていないのであり、寿命の長短や、人間世界での活動の大小・強弱が問題になるのではない。それらは、この詩的空間においてすべて移ろう水面に映る仮象にすぎないのであり、神的なるものから見れば、さざ波、揺れる水の面の動きでしかないものである。真の自然の形象は、神的なるものの存在を感得することから見て取ることが可能になる。

- 30) ここでの詩人と同じ役目を担っている神的なるものとしては、たとえば、ヘラクレス、エムペドクレス、大地、自然などが存在する。

LITERATURVERZEICHNIS

TEXT

- 1) Hölderlin : Werke und Briefe, hrsg. von Friedrich Beißner und Jochen Schmidt. Frankfurt am Main 1969.
- 2) Hölderlin : Sämtliche Werke. Große Stuttgarter Ausgabe. (StA.)
8 Bde. in 15 Teilbänden, hrsg. von Friedrich Beißner und Adolf Beck. Stuttgart 1943-1985.
- 3) Hölderlin : Sämtliche Werke. Kritische Textausgabe. (KTA.) 20 Bde., hrsg. von D. E. Sattler u.a.. Frankfurt am Main 1975-2008.
- 4) Hölderlin : Gesammelte Werke, hrsg. von Hans Jürgen Balmes. Frankfurt am Main 2008.
- 5) 手塚富雄・浅井昌男他訳 : ヘルダーリン全集 [全4巻] (河出書房新社) 1973.
- 6) 川村二郎訳 : ヘルダーリン詩集 (岩波書店) 2011.

LITERATUR

- 1) Bennholdt-Thomsen, Anke / Guzzoni, Alfredo : Marginalien zu Hölderlins Werk. Würzburg 2010.
- 2) Binder, Wolfgang : Sprache und Wirklichkeit in Hölderlins Dichtung, in: Hölderlin- Jahrbuch 9 (1955-56) , S.183-200.
- 3) Böckmann, Paul : Das Späte in Hölderlins Spätwerk, in: Hölderlin- Jahrbuch 12 (1961-62) , S.205-221.
- 4) Böschstein, Bernhard : Hölderlins späteste Gedichte, in: Hölderlin- Jahrbuch 14 (1965-66) , S.35-56.
- 5) Böschstein, Bernhard u.a. : Über Hölderlin. Transzendente Reflexion der Poesie. Frankfurt am Main 1970.
- 6) Büttler, Stefan : Natur-Ein Grundwort Hölderlins, in: Hölderlin- Jahrbuch 26 (1988-89) , S.224-247.
- 7) Dahlke, Karin : Äußerste Freiheit. Wahnsinn / Sublimierung / Poetik des Tragischen der Moderne. Würzburg 2008.
- 8) Dilthey, Wilhelm : Das Erlebnis und die Dichtung. Lessing-Goethe-Novalis-Hölderlin. Göttingen 1970. S.242-317. u. S.326f.
- 9) Frank, Manfred : Hölderlin über den Mythos, in: Hölderlin- Jahrbuch 27 (1990-91) , S.1-31.
- 10) Gehrman, Michel : Bereit an übrigem Orte. Irritationen und Initiationen zu Hölderlins mythopoetischen Zyklus der Nachtgesänge. Würzburg 2009.
- 11) Geisenhanslüke, Achim : Nach der Tragödie. Lyrik und Moderne bei Hegel und Hölderlin. München 2012.
- 12) Gilby, William : Das Bild des Feuers bei

- Hölderlin. Bonn 1973.
- 13) Gonther, Uwe / Schlimme, Jann E. (Hrsg.): Hölderlin und Psychiatrie, in : Schriften der Hölderlin-Gesellschaft. Bd. 25. Bonn 2010.
- 14) Groddeck, Wolfram : Die Nacht. Überlegungen zur Lektüre der späten Gestalt von Brod und Wein, in: Hölderlin-Jahrbuch 21 (1978-79) , S.206-224.
- 15) Guardini, Romano : Hölderlin. Weltbild und Frömmigkeit. München 1955.
- 16) Heidegger, Martin : Hölderlins Erde und Himmel, in: Hölderlin- Jahrbuch 11 (1958-60) , S.274-294.
- 17) Komma, Karl Michael : Hölderlins 'Hälfte des Lebens' , in: Hölderlin- Jahrbuch 16 (1969-70) , S.325-335.
- 18) Kreuzer, Johann (Hrsg) : Hölderlin-Handbuch. Leben-Werk-Wirkung. Stuttgart 2011.
- 19) Rühle, Volker : Verdichtete Zeit. München 2010.
- 20) Schmidt, Jochen : Der Begriff des Zorns in Hölderlins Spätwerk, in: Hölderlin-Jahrbuch 15 (1967-68) , S.128-157.
- 21) Schmidt, Jochen : Sobria ebrietas. Hölderlins 'Hälfte des Lebens' , in: Hölderlin- Jahrbuch 23 (1982-83) , S.128-157.
- 22) Wörterbuch zu Friedrich Hölderlin I .Teil : Die Gedichte, hrsg. von W. Landers, H. Schanze und H. Schwerte. Tübingen 1983.
- 23) Schinzinger, Robert : Das deutsche Gedicht. (第三書房) 1969. S.49-53 u. S.129-133.
- 24) マルティン・ハイデッガー, 三木正之 / アルフレード・グッツオーニ訳 : ヘルダーリンに寄せて [ハイデッガー全集 第75巻] (創文社) 2003.
- 25) 小林繁吉 : ヘルダーリン の「最後期の四季の詩」について (八戸工業大学紀要第30巻) 2011. S.27- 34.

要 旨

湖面上で常に揺れ動く風景画のような自然の映像は、ヘルダーリン独自の別次元の想像上の詩的世界において、地上にあるすべてのものの無常を示している。ここで白鳥の一羽として登場する詩人は、頭を神聖で酔うことのない水に浸し、色彩豊かな晩夏の最高の時から、氷のように冷たい白と黒の冬の最悪の時への変化を感得する。すなわち、頭を水に浸すことで、四季の変化によって示される無常が結果として現われる。乏しい時代に、詩人は、天上のものたちが天上界から見ているこの地上界の中に存在するすべてのものに対して、神的なるものによる支えと現存を伝え、神々の恩寵を啓示するために詩をつくる。生の途上で、詩人は預言者としての使命を全うしようとする。

キーワード : ヘルダーリン, 自然, 水, 冬, 詩人

